群教セ	G12 - 01
	平14.207集

生きものとかかわりながら 自己への気付きを深める生活科指導

―振り返りに自覚化の場の設定と 多様な表現方法を取り入れて―

特別研修員　　小川　利子　（新田町立生品小学校）

≪研究の概要≫

本研究は、子どもたちが飼育活動を通して抱いた思いや気付きを自覚化する場を設定することにより、生きものとのかかわりを深められるようにするものである。

また、振り返りの表現活動に多様な表現方法を取り入れることにより、生きものの命を大事にしようという意識をもって世話ができたり、生きものとのかかわりが上手になったりした自分の成長に気付けるようにしたものである。

【キーワード：生活科　飼育活動　自覚化　かかわり　多様な表現方法　自己への気付き】

Ⅰ　主題設定の理由

子どもたちを取り巻く自然や社会の変化は、子どもたちが自然と触れ合う機会を乏しくさせている。子どもたちが自然とかかわる体験を通して、自然の不思議さや命の大切さが実感できたり、思いやりの心を育むことは大切である。この時期の子どもは、動物と触れあうことに対して、強い興味・関心を示す傾向にある。

本学級の子どもたちも、小魚や昆虫に対する関心が高く、教師からの働きかけがなくても自分で飼いたい生き物を家からもってきている。校庭で見つけたバッタやカエルなどを教室に持ち込み、友達と相談して餌（えさ）を持ち寄り、休み時間は、昆虫の世話をしたり、触って遊んだりしている。

しかし、これまでの飼育活動の問題点として、生きものを継続して観察したり世話をしたりしている様子は見られなかった。それは、子どもたちが生きものに興味・関心はあるものの、生きものに命があることを実感したり生きものが好む環境を作ったりするなど、かかわりを深めるような取り組みが乏しかったと思われる。また、植物の栽培活動では、植物の変化や成長の様子を観察カードに記録してきたが、植物の世話をする自分自身に視点を当てた振り返り活動の指導を十分にしてこなかったため、栽培活動を通しての自己への気付きに至らなかったように思われる。

「生きている」教材は、日々新たな驚きや活動を作り出すものである。一緒に遊ぶ体験や思うようにならない体験から、生きものの立場に立ったかかわり方や生きものに対する見方や考え方、感じ方が変わってくるであろう。また、飼育している生きものの成長は、子どもにとって、自分自身を映し出す鏡であり、自分も周囲の人に守られ支えられてここまで成長してきたということに気付くための材料となるであろう。

そこで、飼育活動の過程での振り返りで、子どもの気付きを自覚化させる場を設定する。それによって子どもたちは、一層生きものの命を大切にするようになるであろう。さらに、まとめとしての振り返りの場で、学習活動の過程で気付いたことや感動したことを、多様な方法を用いて表現活動する。これまで行ってきた観察日記だけでは、子どもたちは、自分の思いを十

分に表現しきれないと考えたからである。表現方法を自己選択することで子どもたちは自分の得意なことをいかして生き生きと表現するであろう。生きものの変化や成長の様子、それにかかわる自分自身を表現することによって、自分自身を見つめ、「自分にもこんなことができるんだ」という自信をもち、自己の成長への気付きを深めることができると考え、本主題を設定した。

II　研究のねらい

振り返りの場に、自覚化の場の設定と多様な表現方法を取り入れることで、生きものとのかかわりを通した自己への気付きを深めることができることを実践を通して明らかにする。

III　研究の見通し

1　観察活動の節目に、子どもの気付きや生きものへの思いを自覚させる場を設定すれば、子どもたちが生きものの命を大切にするようになるであろう。

2　まとめとしての振り返りの場で、学習活動の過程でつかんだ自分の思いや願いを、自分の得意なことを活かして表現できるように支援すれば、生きものとのかかわりを通した自己への気付きを深めることができるであろう。

IV　研究の内容と方法

1　研究の内容

⑴　「生きものとかかわる」とは

生きものの成長や変化に関心をもち、死なせないように気を配りながら一生懸命に観察や世話をすることである。そして、生きものには自分と同じ命があり、世話の仕方によっては、死んでしまうものやよく成長しないものが出てくること、成長により変化することに気付き、命の大切さや飼育の難しさ、生きものとかかわる喜びを実感することである。

⑵　「自己への気付きを深める」とは

飼育活動を通して、自分自身を見つめ、小さな生きものの命を大事にしようという意識をもって生きものの世話をしてきた自分の成長に気付いたり、以前より生きものとのかかわり方が上手になった自分に気付いたりすることである。

⑶　「振り返りに自覚化の場の設定をする」とは

飼育活動の過程で、生きものの変化や気付いたことを観察カードに記していく。そして観察活動の振り返りとして、観察カードに書かれた事の中から子どもたちの知的な気付きや願いを、全員の前で紹介することによって、知的な気付きや生きものへの思いを自覚させることである。

⑷　「多様な表現方法を取り入れる」とは

学習活動のまとめとして、学習活動の過程でつかんだ自分の思いや願いを表現する場を設ける。その際、劇・紙芝居・工作・クイズ・ペープサート・ミニ新聞作りなどいろいろな表現方法を紹介し、子どもたちが自己選択して、ひとりあるいはグループで表現活動をすることである。表現活動の後で、友達の工夫のよさを称賛する活動をする。友達から認められることで自信をもち、次の活動への意欲をもてるようにする。

2　研究の方法

⑴ 授業実践計画と抽出児

対象	新田町立生品小学校　１年　35名　（男子15名 ・女子20名）		
期間	平成14年９月～10月	単元名	いきものだいすき
抽出児	（A 子）観察を熱心にやり、生きものの成長や変化に気付くことができる。自分のがんばりやよさにも気付けるように支援していきたい。		（Ｂ子）学習活動にまじめに取り組むが、自分の思いを表現することにやや消極的である。飼育活動を通して自分の思いを表現できるように支援していきたい。

⑵ 検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見 通 し １	つかむ過程で、子どもの気付きや蚕への思いを自覚させる場を設定したことは、蚕の成長を願い、生命を大切にしようという意識をもって世話ができるようになるのに有効であったか。	行動観察、学習カード、つぶやき
見通し　２	まとめの過程で、蚕を飼育した時の思いや願いを表現する際に多様な表現方法を取り入れたことは、子どもたちが自分自身の成長への気付きを深めるのに有効であったか。	行動観察（ビデオ・写真）、作品、つぶやき

Ⅴ 研究の展開

1　単元の構想

本単元は、学習指導要領の内容の（７）にあたり、蚕の飼育活動を通して、蚕が生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、蚕を大切にすることができることをねらいとしている。蚕は成長の変化が明解で飼育し易く、継続して世話ができる生きものである。また、校区もかつては養蚕農家も多く、今でも桑畑が点在し地域人材の活用も可能であることから、飼育が可能であると考えた。

まず、「ふれる」過程で、繭や絹製品との出会いから蚕に興味をもつようにする。蚕の飼育方法を調べたり、えさをもらう交渉などをして飼育を始める。「つかむ」過程では、蚕の世話をしながら、蚕の変化や自分の思いを観察カードに記録して、蚕の不思議さやおもしろさに気付くようにする。「まとめ」の過程では、蚕の飼育を通して得た思いや願いを自分の好きな方法で表現活動する。飼育活動を通してのいろいろな気付きや自分の頑張りを振り返ることにより、自己の成長を自覚できるようにする。

2　目標及び評価規準

目標	○　蚕の飼育活動を通して、生きものが成長していることや自分と同じ生命をもっていることに気付くとともに、生きものに親しみをもち、生きものの命を大切にすることができる。
評価規準	○　蚕の生態や成長に関心をもち、進んで世話をしたりかかわったりする。（関心・意欲・態度） ○　・蚕について気付いたことや世話をしている時の心情を絵や文、つぶやきなどで表現する。 ・蚕の飼育で問題が生じたときは、適切な世話の方法を調べたり、聞いたりして、解決しようとする。 ・飼育活動を振り返り、自分の好きな方法で表現活動する。　（思考・表現） ○　蚕とかかわりながら、蚕の生態や成長、生命の尊さに気付いたり、自分や友達の頑張りに気付いたりする。　（気付き）

3　指導計画

過程	時間	主な学習活動	支援および指導上の留意点	見取りの視点　○関心・意欲・態度 ◎思考・表現　□気付き
ふれる	2 1	○蚕の飼育への意欲をもち、飼育方法について知っていることを発表したり、調べる内容や方法を話し合って整理する。 蚕の入手先・飼育箱・餌（えさ） ○各自で調べてきたことを発表する。	○繭や絹製品を見せたり、蚕の飼育体験を話し、蚕の飼育への意欲付けをする。 ○蚕は、教師が入手できることを知らせる。 ○次時までに各自で調べてくるようにする。 ○　調べてもわからないことがある場合は、養蚕農家の人に質問するようにする。	○蚕に興味をもち、飼育への意欲をもっている。 ◎蚕の飼育方法について知っていることを発表し、調べる内容や方法を話し合っている。 ◎調べてきたことを発表している。
見通し1 つかむ	4	○蚕の変化の場面をとらえて、観察カードに記入していく。（1／2単位時間×8回） ○観察の振り返りで、自分や友達の観察日記の中から教師が紹介するものを聞き、価値ある気付きや蚕への思いを自覚する。	○毛蚕・脱皮・眠・営繭など変化の場面をとらえて観察カードに書くようにする。その他、常時活動の中で、気づいたこと、疑問に思ったこと、調べてわかったことは、随時観察カードに記録するように助言する。 ○蚕の変化をとらえやすいように、身長や体重をはかり、写真にとっておく。 ○飼育の途中で疑問に思ったことを、調べたり聞いたりするよう助言する。 ○観察日記の中から、蚕の変化や成長・蚕への思いがよく書けているものを全員の前で読み、意識付けや賞賛をする。	□蚕の成長に気付いている。 ◎気付いたこと、疑問に思ったこと、調べてわかったことを観察カードに記入している。 □教師の読む観察日記を聞いて、価値ある気付きや蚕への思いを自覚している。
	1	○繭から絹製品になるまでの流れを知り、繭で終わらせるか、成虫まで観察するかを話し合う。	○これまで飼育してきた蚕の生命にかかわる大事な問題として、子どもが納得するまで話し合うようにする。	◎繭になった後の蚕の扱いについて、生命の問題ととらえ、真剣に話し合っている。
見通し2 まとめる	5 1 1	○飼育活動のまとめとしての発表会の仕方を話し合う。 ○発表の方法を考える。 ○例示された表現方法の中から自分の好きな方法を選び、発表会の準備を進める。 ○発表会をする。 ○発表会の終わりに、称賛カードの交換をする。 ○感想文を書く。	○表現方法（劇・紙芝居・工作・クイズ・ペープサート・ミニ新聞など）を紹介し、好きな方法を選ぶようにする。 ○表現方法をなかなか選択できない子には、対話をして、得意なことを見つけられるように支援する。 ○表現したい場面を決められないときは、写真や観察カードを見て、活動を振り返るように支援する。 ○準備中の助言を思い出させ自信をもって発表するように励ます。 ○友達の発表の工夫を見つけられるように、しっかり見聞きするよう助言する。	○意欲的に発表の準備を進めている。 ◎自分の好きな表現方法を選択し、工夫している。 □世話をしてきた自分の成長に気付いている。 ◎自信をもって伸び伸びと表現している。 □　自分や友達のがんばりに気付いている。 □自分の成長に気付いている。

Ⅵ　研究の結果と考察

1　つかむ過程で、子どもの気付きや蚕への思いを自覚させる場を設定したことは、蚕の成長を願い生命を大切にしようという意識をもって世話ができるようになるのに有効であったか

子どもたちは、卵からかえったばかりの蚕（毛蚕）との出会いからおよそ二か月間、蚕とかかわっていく。初めはまとめて一つの飼育箱で観察をしていたが、子どもたち一人一人が蚕とのかかわりを深められるように、毛蚕が一度脱皮して二齢幼虫になった段階で、各自の飼育箱で、三頭ずつ飼育を始めた。子どもたちには、小さな弱い生きものの命を大切に守りながら世話をするように投げ掛けた。毎日、朝と帰りの二回ずつ餌（えさ）を与え食べ残しの葉やふんの始末をした。子どもたちの気付きや蚕への思いを自覚できるように、観察の振り返りで、子どもたちの記録の中から、蚕の様子や自分の思いがよく書けているものを全員の前で紹介した。

Ａ子は、初めのころの観察日記に、次のように書いていた。

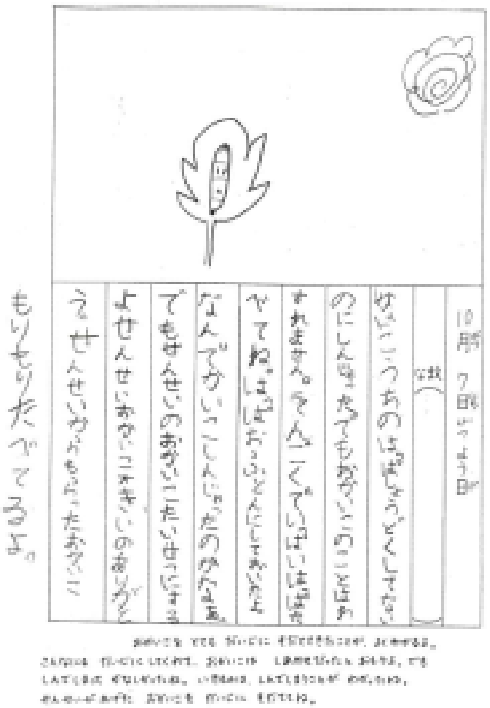
> 9/26「きょうえさをあげたとき、かわがありました。かわは、うんちがつぶれたかとおもいました。かいこがちょっとおおきくなっていました。もっともっとおおきくなってほしいです。」

Ａ子は観察を通して、蚕が脱皮をして成長していくことに気付いていた。皮の色が黒っぽくなっていることにも着眼していた。そこで、この気付きを広げるため、観察日記をみんなの前で読んだ後、「Ａ子ちゃんは、蚕の皮を見つけたんだね。蚕は皮を脱ぐと大きくなるのかな。このあとまた皮を脱ぐかな。」と言葉掛けをした。すると、クラスの子どもが、「先生、ざりがにも同じだよ。皮を脱いで大きくなるんだよ。」と発言した。その後Ａ子は、蚕が脱皮する機会を観察しようとして、これまで以上に熱心に観察をした。友達の蚕がぐったりしていて翌日脱皮の皮があったという報告を聞くと、「先生、蚕がじっとしているよ。もうすぐ脱皮するかもしれない。」と見せにくるようになった。そして、図書室の図鑑を見て、蚕が４回脱皮することを調べてきた。これは、Ａ子の価値ある気付きや蚕への思いが自覚されている姿であると考える。

10/6 朝、Ａ子が自宅に電話をしてきた。「先生、お蚕死んじゃったの。どうしてだか、わからないの。」祖父母の畑の桑の葉を安全だと確認してからあげたのにもかかわらず、蚕が死んでしまったのだ。Ａ子はかなりがっかりした様子で、観察日記には次のように書いた。（資料１）ここから、Ａ子が蚕の餌（えさ）の安全に気を配りながら世話をしていたこと、蚕の成長を願い、蚕にたくさん桑の葉を食べさせたいと思っていたことがわかる。また、死んでしまった蚕に葉っぱのふとんを掛けたことから、蚕を擬人化してとらえ友達のように大切に思っていたことも読み取ることができる。

Ａ子には、「蚕が死んでしまって残念だったね。死んでしまった蚕に葉っぱのおふとんをしいてあげたんだね。Ａ子ちゃんが今までどれだけ蚕のことを大事にして育ててきたかが先生にはよく分かるよ。」と声を掛けた。Ａ子はその後、新しくもらった蚕の世話と観察を熱心に続け、蚕の

資料１　Ａ子の観察日記



変化を頻繁に報告にきた。

10/10「きょうみたら、おしりにかわがありました。しかもかわをぬいでいるところでした。うれしかったです。」 10/17「おかいこすごいはっぱたべてたよ。」 10/20「かいこにみみをちかづけたらぱりぱりぱりとたべてるおとがした。せなかのところにまあくがあった。」

ここには、一度蚕を死なせてしまった悲しみを味わったＡ子が、蚕の生きている証・成長の証拠である脱皮の皮を見つけて喜んでいる気持ちが表れている。また、蚕が葉を食べる様子を耳を澄ませながらじっと見つめて観察日記を書いていることから、Ａ子が小さな蚕にも自分と同じ命があり、生きるため、成長するために一生懸命食べていることを実感していると考える。

Ｂ子は、飼育活動の初めごろ、観察日記に次のように書いた。

9/12「かいこといっしょにいてあげたいな。はやくそだててあげるよ。いっぱいたべてね。」

Ｂ子が蚕に親しみをもっていることが読み取れた。そこで、Ｂ子の観察日記をみんなの前で読んだ後、Ｂ子に、「Ｂ子ちゃんは蚕ととても仲良しになったんだね。蚕の友達になれたね。一生懸命育てようと思っているんだね。」と声を掛けた。その後、Ｂ子は、休み時間に蚕をいじって遊ぶことが多くなった。以前からおとなしい子で自分から担任に話し掛けることをあまりしない子だったが、蚕の変化に気付くとすぐに担任に話しに来るように変わってきた。

ある休み時間、Ｂ子は、担任の飼育箱をのぞきながら次のようにつぶやいていた。「先生の蚕は大きいね。始めは皆同じ大きさだったのに、今はどうして大きさが違うんだろう。」側にいた友達が、「葉っぱをいっぱい食べるからじゃないの。」と言うと、Ｂ子は「箱の中に大勢いてあったかいのかな。」とつぶやいた。Ｂ子は、蚕は気温が暖かい方がよく成長することに気付いていた。そこで、この気付きを広げるため、二人のやりとりを全体の前で紹介し、「Ｂ子ちゃんは、蚕は暖かい方が早く大きくなることに気付いたんだね。虫は、寒いのが苦手なのかな。」と声を掛けると、クラスの友達が、「先生、虫はあったかい方がいいんだよ。蛇とか、カエルも冬は冬眠するんだよ。」と発言した。その後、Ｂ子は観察日記に次のように書いた。

10/20「あさおきたらちょっとさむかったから、かいこもさむいとおもったので、つくえのうえにだいをおいてでんきをつけてあっためてみた。」

更に、「先生、玄関じゃ寒いから、蚕の箱をこたつに入れてみたんだよ。」と話してくれた。

これは、Ｂ子が価値ある気付きを自覚した姿であると考える。また、自分と同じように蚕も寒さを感じていると思い、暖めようとした行為から、Ｂ子が蚕を擬人化してとらえていること、死なせないように気づかいながら大切に育てていることが読み取れる。ここに、Ｂ子の蚕を思いやる気持ちが表れている。

子どもにとって生きものを死なせないように世話を続けるのは、大変な活動であったと思われる。しかし、観察の振り返りで、全員の前で教師が子どもの気付きを取り上げて賞賛し、自覚させることが子どもたちの励みにもなり、蚕の成長を願い、生命を大切にしようという意識をもって世話ができるようになる手立てとして有効であったと思われる。

2　まとめの過程で、蚕を飼育した時の思いや願いを表現する際に多様な表現方法を取り入れたことは、子どもたちが自分自身の成長への気付きを深めるのに有効であったか

これまでの飼育活動のまとめとして、「蚕を育ててきた時のことを、友達や家の人に教えてあげよう。」と投げ掛け、蚕の発表会をすることになった。はじめに、どんなことを教えたいかを話し合い、「蚕の変化の様子や世話の仕方だけでなく、世話をしてきた自分たちの頑張りも表現しよう。」と投げ掛けた。発表の方法は、子どもたちのアイデアや教師の例示の中から自己選択させ、紙芝居・ペープサート・劇・工作の４つに決まった。子どもたちは、観察日記

のファイルや写真などを見て、飼育活動の様子を思い出しながら、熱心に発表会の準備に取り組んでいた。

Ａ子は、ペープサートを選び、グループの中心となってシナリオを考えた。「蚕が大きくなるまでに自分が頑張ってきたことを劇にしてみよう。」と投げ掛けたが、なかなかシナリオ作りが進まなかった。そこで、写真を見たり観察日記のファイルをもう一度読み返してみるようにアドバイスした。更に、「蚕にどんなことをしてあげたの。」「大変だったことは何。」「何に気を付けて世話をしたの。」と声を掛けながら、頑張ってきたことを思い出せるように支援した。

Ａ子はシナリオに次のように書いた。

あさかいこをみたら、こてんとなっていました。「いきてるかな。しんじゃったのかな。」かいこは、だっぴをしていました。・・略・・はっぱがからからだったからとりかえてあげました。大きくなってからうんちをかたづけるのがたいへんになりました。『うれしいな。』とかいこはいいました。にんげんは「つかれたな。」といいました。かいこがちいさいうちは、はっぱをじゅうえんだまぐらいのおおきさにちぎってあげました。かいこがおおきくなったらおおきいままのはっぱをあげていいんだよ。

資料２　熱心にペープサートを作る

Ａ子は、人間の役となり、蚕の世話をする様子を伸び伸びと演じていた（資料２）。シナリオの文中でＡ子は、蚕の台詞を「うれしいな。」と書いている。これは、蚕が繭になるまで世話をすることができたＡ子自身の喜びを表していると考える。また、人間の台詞で、「つかれたな。」と書いている。これは、世話が大変でもう飼育をしたくないという気持ちではなく、逆に、蚕を死なせないように一生懸命世話をするのは本当に大変だったが、それを自分はやり遂げられたのだという、誇らしい気持ちの表れであると考える。ここから、蚕の世話を頑張れた自分に気付いていることが読み取れる。

Ｂ子は、工作を選んだ。「何を作るの。」と声を掛けると、「かいこがだんだんおおきくなっていくところ。」と答え、紙粘土で桑の葉や蚕を作り始めた。「世話をした自分のこともいれてね。」と言うと、「うんちをつくろうかな。トイレットペーパーのしんでつくったまゆのおうちもつくろうかな。」とつぶやきながら、飼育した時の思いを振り返って工夫して作っていた。Ｂ子の作品には、大きさの違う蚕・桑の葉・あちこちにちらばったうんち・繭床にしたトイレットペーパーの芯・繭・世話をした自分自身が表現されていた（資料３）。Ｂ子の蚕はなぜか繭になるのが遅く、友達の育てた蚕のほとんどが繭になっても蚕の姿のままで、Ｂ子はとても心配していた。それだけに、自分の蚕が繭（えさ）になった時のＢ子の喜びは大きかった。この作品の中に繭が表現されていることから、毎日餌やりや糞の始末をし続けて、ついに繭を作るところまで育てることができた喜び・達成感と、そこまで頑張れた自分に気付いていると考える。

資料３　変化する蚕と世話をする私

発表会の終了後、蚕の飼育活動を振り返っての感想文で、Ｂ子は次のように書いた。

「かいこのともだちになった。はっぱをあげられた。かいこのせわをあきらめないじぶんになった。かいこがしんじゃったとき、こころをこめてうめてあげた。」

この感想からは、蚕とかかわるうちに蚕に親しみを感じるようになったことや、繭になるまであきらめずに継続して蚕の世話ができた自分に気付いていることが読み取れる。また、死んでしまった蚕を粗末に扱うことなく、心を込めて埋めたと書いていることから、小さな命を大事にできた自分に気付いていることがわかる。

また、劇を選んだあるグループは、次のようなシナリオを作った。

こけこっこ。あさになりました。いっかいめのめざましどけいがなりました。じりじり。ぺたん。「まだねむいよ。」またまたＨちゃんはねてしまいました。『まだえさくれないのかな。』『おなかすいたよね。』にかいめのめざましどけいがなりました。「あ、あさだ。もうおきなきゃ。かいこにえさをあげないとしんじゃう。」『あ、えさだ。もうおなかぺこぺこだよ。』かいこはどんどんそだっていきました。いっかげつたちました。「あ、かいこがくびをふっている。もうすぐまゆをつくるのかな。」「もうゆうがただからえさをあげなきゃ。」「えさをあげたのにどうしてたべないのかな。」『もうまゆをつくらないと。』くびをふっていたかいこが、まゆをつくりはじめました。「あ、くびをふっていたかいこがまゆをつくりはじめたから、トイレットペーパーのしんをつくってかぶせないと。」くびをふっていたかいこがまゆになりました。まゆのなかでさなぎになりました。まゆからががでてきました。

シナリオの中に、朝眠いのを我慢して早く起きて餌（えさ）をやったり、夕方になるとまた餌（えさ）をあげたりする様子を書いていることから、苦労して蚕の世話を続けてきた自分の頑張りに気付いていることがわかる。また、蚕が首を振っている様子を見て繭床を用意しようとする場面が表現されていることから、蚕の様子をよく観察しながら世話を続けてきた自分の姿に気付いていることがわかる。

表現活動の際に多様な表現方法を取り入れたことは、子どもたちがこれまでの蚕との日々を振り返るとともに、世話を続けてきた自分自身を見つめる機会となり、自分自身の成長に気付くのに、有効であったと思われる。

Ⅶ　研究のまとめと今後の課題

○　子どもにとって毎日の飼育活動には多くの苦労があったが、観察活動の節目に、教師が子どもの気付きや思いを取り上げて賞賛し自覚化させることが子どもたちの励みになり、生きものの命を大切にしようという意識を持たせる手立てとして有効に働いたと考える。

○　学習活動のまとめとしての振り返りの場で、表現活動に多様な表現方法を取り入れたことは、子どもたちがそれまでの飼育活動の日々を振り返ると同時に生きものにかかわってきた自分自身を見つめる機会となり、自己の成長に気付く手だてとして効果的であったと考える。

○　約二か月間にわたる飼育活動で、子どもの価値ある気付きを的確に捉えることの難しさを感じた。そこで、事前の準備段階で子どもの反応を予測し、気付きを広げるための投げ掛けができるように研究を続けていきたい。

＜参考文献＞

・嶋野　道弘　編著　『実践からつくる生活科の新展開』　東洋館出版社（1999）